鏡の中の七月

桜桃夢

鏡の中の七月：目次

プロローグ

１諍い

奥付

プロローグ

　手に感触があった。
　酷く歪む顔があった。

　何故だろう？？
　彼は何故何も言わないのだろう？？

　手に流れていくものがあった。
　頬に流れていくものがあった。
　それらがなんなのかワカラナイ。

「なんで……、っだよ」

　何か言葉が零れた。
　それは、何かに対する訴え。

「どうしてこんなことになったんだよ、七月」

　彼の歪んだ顔は変わらない。
　彼に答えて欲しかった。
　けれど、彼の唇は緩んだまま動かない。
「どうしてなんだよ」

　本当は、分かっていた。
　彼がなぜ問いかけに応えくれないのか。
　しかし、認めたくなかった。

「なんで、お前はみんなを……」

　認めてしまったら、唯一残った友達を……
　自分が……

「殺したんだよ」
　殺したことを認めてしまうのだから……

1 諍い

「おい、てめぇ。あれ はどういうことだ」
　一人の青年が複数の人間に囲まれていた。明らかに多勢に無勢だが、教室に大勢いる生徒たちは誰も助けに入らない。そればかりか、彼らに目を合わせようともしない。
「な、なんのこと」
　青年は、震えた声で問い返す。
「あっ、昨日のことだよ。お前がやったんだろ」
「えっ、あっ」
　何か思い当たることがあったのか、青年は激しく動揺する。そして、
「あれは僕じゃない。僕じゃないんだ」
　と、突然うわごとのように同じ台詞を繰り返し始めた。
「僕じゃないだと、どういう意味だ」
「僕じゃない、僕じゃない。あれは僕じゃ……」
　声が届いていない。目の焦点は合っておらず。ただ、手元をうつらうつらしている。青年は、今の状況すら忘れているようだ。
「ふざけんなよ、てめぇ」
しびれを切らした一人が胸倉を捻りあげた。
「…ない。あれは、僕じゃ……」
　それでも、青年は同じ台詞を繰り返す。
「あっ、しらばくれんじゃねぇよ」

教室に、何か鈍い音 が響きわたった。黒沼は、そのせいで目が覚めた。最悪の分類に入いる寝起きだ。昨夜は、珍しく徹夜をしてしまった。だから、非常に眠い。本当は、一日中寝て過ごす予定だった。けれど、起こされて黒沼はここにいる。それだけでも気分が最悪のところにこの仕打ちである。休み時間くらい静かにしろ。そう黒沼は、心の声で悪態をついた。そして、また寝ようとしたところに、
「ねぇ、裕樹」
　と、司の声が聞こえ、身体を揺すられる。安眠妨害も甚だしい。寝たふりをしてやりすごそうかと黒沼を考える。けれど、言葉も動きも止まらない。仕方がないので、突っ伏していた顔を持ちあげて声をかけた。
「なんのようだよ、司」
　どうしても、不機嫌な声を出してしまうが、
「ねぇ、あれ止めた方がいいんじゃないかな」
　と、のんびりとした声で司は返答する。
「あっ、あれってなんのことだよ」
「あれは、あれ」
　目をこすりつつ、司が指し示すほうを向いてみる。そこには、知っている顔ぶれが並んでいた。同じゼミの不良連中だ。毎度、問題を起こす馬鹿どもだ。そんなことで、いちいち声をかけられても困る。ため息をつきつつ、黒沼は悪態をついた。

「また、あいつらか。いつものことじゃないか」
「もう、そうじゃなくて。真ん中にいる人見てよ」
　司は、悪態にめげずにゆったりと答える。
「真ん中にいる人？」
　ここにきて、黒沼は初めて喧嘩の中心で倒れている人物を見た。そこにいたのは、よく知る人物だった。南七月――親友とも言えるやつだ。黒沼は、やっとことの重大差に気がついた。
「な、何があったんだよ」
　性急に答えを得ようと問いを放つ。
「さぁ、何があったんだろう」
けれど、いつも通りにのんびりと答えが返ってきた。黒沼は、その雰囲気にいら立ちを覚えたが、喧嘩を止めるためにもその場から動きだした。

「何があったんだよ、お前ら」
　黒沼は、七月と不良たちの間に割ってはいる。不良たちの中心に立ってもおじけ付きはしない。入学当初に、こいつらとはやりあっているのだ。無駄な争いはあっちもしたがらないだろう。それに、一応ここは教室だ。
「お前には関係ねぇよ」
　不良グループの一人が冷めた目で答える。こいつは、確かグループのリーダー格だ。
――なぜ、そんな奴が七月を？
　疑問が沸き起こるが、
「そうだろ。な・な・つ・き」
と、リーダー格が七月に蹴りを入れるのを見てすぐに消して飛ぶ。
「おい、やめろ」
「うるさいな。いくらお前でも、この人数を相手に出来るのか」
　正直、この人数は少しきつい。
――金切が入れば……
　思い辺りを見回すがいない。
「そうそう、おとなしくして……　ん？」
　リーダー格は、何を思ったのか黒沼をじろじろと見る。
「まさか、昨日のはお前か？」
　黒沼には、思い当たる節は一切なかった。昨日は、朝から無線機の修理をしていた。しまいには、今日の朝まで掛っている。古い型番で直すのに苦労したのだ。
「一体、なんの」
「そいつは関係ない！」
　黒沼の言葉に被せるように声があった。七月だ。あれほどの蹴りを受けていたはずなのに大声で遮った。
　周囲が驚く中、七月は立ち上がる。
「よく立ったな、七月君」
　ひゅーと口笛をならし、リーダー格は七月を称賛する。その称賛で我に返ったのか、周囲の不良たちは、次々と七月をはやし立てる。
「こいつは関係ない」

　周囲のはやし立てに物怖じさず、毅然とした態度で七月は言い放つ。黒沼は、意外に思った。七月とは、数か月間共にいる。だから、大体のことを理解している。そう思っていたのだ。けれど、黒沼の前にいる青年は、自分の理解していた像と異なっていた。さらに、驚くべきことが起こった。
「こいつは関係ない」
　黒沼を後ろにかばうように、七月が前に出たのだ。七月は、リーダー格とにらみ合う。経つこと数秒。先に目をそらしたのは、不良たちのリーダー格のほうだった。リーダー格は、ばつが悪いかったのか降参ポーズをとり、
「これじゃあ、まるで俺らが悪者だ。勘弁してほしいな、全く」
　と、半ばおちゃらけ七月に語りかける。七月は、その間ずっと無言でリーダー格を見ていた。黒沼は、何か底知れぬもの を七月から感じた。
リーダー格も何かを感じたのか、
「おい、いくぞお前ら」
　と、周囲の不良連中に声を投げかけまごつく周囲をよそに立ち去っていく。七月は、その間やはり何も言わず相手を見ているだけだった。不良連中が視界から消えたあと、黒沼は七月に話しかける。
「おい、七月何があったんだよ」
「……」
　しかし、七月は何の反応も返さない。
――分けが分からなねぇ
心の中で呟くが、七月からの反応がない限り分からないものは分からない。黒沼は、再び声をかけようとするが、それよりも早く七月は教室から去ろうとする。慌てて七月の手を強くつかむ。“親友”として何があったか聞きたかった。何があったのかどうしても気になった。だから、もう一度七月に声をかける。
「何があったんだよ、七月。説明くらいしてくれよ」
　反応があった。それは、拒絶。黒沼は何があったのか理解ができなかった。あの七月が手を振り払ったのだ。しかも、確かな意思を持って……
――分けが分からない
　再びそう思う。黒沼の思考がまとまる前に七月は、
「なんでもない。一人にさせてくれ」
　と、言い残し去っていってしまった。

二次創作・挿絵について

　ここまでお読み頂き誠にありがとうございます。著作者として嬉しく思います。作品の感想やアドバイス等ありましたらどしどしお願いいたします。

　さて、本作品を気に入って頂けた方は、次の事項をお読み頂きたいです。

１．二次創作について
　本作品に関連した二次創作を大歓迎いたします。使用をご希望の方はコメントにてお願いします。また、完成した作品をご連絡頂けると嬉しいです。また、二次創作品を有料にすることも可能としますがその場合は事前にご連絡ください。こちらで、確認の上判断したいと思います。

２．挿絵について
　本作品の挿絵を大募集します。絵が得意な方。どうぞ、拙作のためにお力を貸してください。また、挿絵は当方のサイト「虚構の書」にも使わせて頂く場合もあります。

３．メディアリミックスについて
　本作品のメディアリミックス（ラジオ・漫画・アニメ）を大歓迎いたします。コメントにてご連絡ください。

鏡の中の七月

http://p.booklog.jp/book/23234

著者 : 桜桃夢
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yusurayume/profile

著者運営サイト
小説サイト：虚構の書
物語をより面白く：レヴフュジオン～夢想の融合～

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23234

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23234